

日本近現代の時代小説： 中里介山、吉川英治を中心に

鈴木貞美
国際日本文化研究センター

1、はじめに

日本における歴史叙述と、その価値規範意識の変遷をたどる作業のひとつとして、近現代において民衆や大衆に享受された「時代小説」群を等閑視することはできないだろう。だが、そのように考えて、作品のあれこれに想いをはせはじめたとたんに、われわれは大きな疑問に逢着することになる。おびただしい数の「時代小説」群のうち、はたして、どれほどの数が歴史叙述の名に値するものだろうか、と。

たとえば、野上弥生子(1885-1985)の「大石良雄」(1926)は、汚名をきて罰せられた播州赤穂藩のもと藩主のあだ討ちをはたした赤穂浪士の事件について、その軍資金など経済的な解釈などを加えている。また、劇作家、真山青果(1878-1948)の「坂本龍馬」(1928)は、その時代のひとりの歴史学者の説を参照しつつ、幕末の維新運動にひとりのキィ・パースンとして活躍した坂本龍馬(1835-67)がもっていた一種の民権主義を浮き彫りにしている。これらは歴史上の事件や人物に新たな像を提出しているという意味で、歴史叙述の範疇に入れることができるだろう。

だが、これには別の異論が出されるかもしれない。「大石良雄」は、はたして「時代小説」といえるのか、「大衆文学」ではないので、「歴史小説」ではないか、と。「時代小説」と「歴史小説」の区別が、いったい、いつごろからなされはじめたのかについても、明確にしなければならないだろう。

だが、先の疑問は、近現代の日本の「時代小説」を代表するひとつに数えて誰も疑わないと思われる中里介山(1885-1944)の『大菩薩峠』(1913-未完)のような作品を前にするとき、ほとんど当惑にかわるかもしれない。『大菩薩峠』が時代を幕末にとっていることは明らかだが、あの荒唐無稽な筋の展開は、はたして歴史叙述の一変種とするものだろうか。ヨーロッパにおいては、歴史的事件を背景にして、虚構の物語を紡ぐものを「歴史小説」(historical novel)と呼び習わしてきたのではないか。とすれば、『大菩薩峠』を「歴史物語」と呼んでもよさそうだが、そうは呼ばれてこなかったし、たとえばディケンズ(Charles Dickens, 1812-70)の『二都物語』(*A Tale of Two Cities*, 1957)と比べても、時代を書く意識は希薄で、そう呼ぶにはためらいが残る。

また、たとえば、やはり近現代の「時代小説」を代表するひとつに数えて誰も疑わないと思われる吉川英治(1892-1962)の『宮本武蔵』(1935-39)は、どうだろうか。たしかに歴史上の人物を主人公にすえて、その遍歴をたどっているが、そもそも史料がほとんど残されていない彼の生活の草ぐさを、それこそ「見てきたように」語る虚構の様を想うとき、はたして、どのような答えがでるだろうか。

そして、それぞれの「時代小説」について、それが歴史叙述かどうかを検討するとき、その疑問は反転し、歴史叙述とは、いったい何をさすのか、という問いが立ち現れてくる。そのようにして、われわれは歴史叙述と虚構の関係をめぐる考察へと導かれてゆくことになる。英語においても、“history”と“story”の語の意味は、一見、截然と

区別されているようでありながら、実は、かなりの重なりをもっている。フランス語の“histoire”、ドイツ語の“Geschichte”は、虚構と事実にもとづく歴史とに意味が分岐したことを、その語がそのまま示している。では、日本における歴史叙述と虚構との関係は、どうだろうか。その特殊性を考察する試みがなされてもよいだろう。

「歴史小説」にせよ、「時代小説」にせよ、作品の書き手のほとんどは、いわゆる知識層に属しており、そこには、当然、知識層の歴史観が反映している。そして、近代以降、知識層の歴史観は、各時代の歴史学の動きに規定されつつ、それに対するリアクションとして、各自の歴史観を形成していった。加えて、広く民衆や大衆に享受される作品の書き手は、それぞれに、その叙述の方法を編み出していった。本稿は、日本近現代の「時代小説」作家を代表する中里介石と吉川英治のふたりをとりあげ、その歴史観と叙述の方法の概略をのべつつ、歴史叙述と虚構との関係を考察するが、その前提として、「時代小説」というジャンルの形成について略述しておかなければならない。また、そのためには、日本における歴史概念と歴史叙述の特殊性と関連して、「時代小説」なるものを生み出した文化的基盤についても、その概要を確認しておかなければならない。それゆえ、全体を三部に分け、Ⅰ「日本における『歴史』の歴史」、Ⅱ「時代小説の発生と展開、その概要」、Ⅲ「中里介石と吉川英治、その『文学』観、『歴史』観と叙述の方法」とする。「結び」では、考察をまとめるとともに、敗戦後から高度経済成長期にかけての「時代小説」ないしは「歴史小説」の概念の変化についても補足しておきたい。

2、日本における「歴史」の歴史

2-1 「歴史」という言葉

歴史叙述は、中国では古くから、学問の四部分類「経・史・子・集」のひとつとされ、官吏の記録をもとに記述され、史料の由緒を厳しく問う態度が確立し、儒学を中心とする学問を意味する「経」とともに「経史」と並び称され、たいへん重視された。易姓革命史観により、唐代以降の正史が断代史の形をとるために、今日、「二十四史」ないしは「二十五史」と通称されるように、基本的には「史」の語を用いる。ただし、唐代以前の「前四史」のうち、司馬遷『史記』(BC.1C)などは通史であり、ほかに司馬光『資治通鑑 [しじつがん]』(1084)なども通史の形式をとる。「歴史」の語も古くから見られるが、それは「史」に対して、断続する「歴代の史」を意味する語として用いられてきた。今日用いられる熟語は、清朝後期にトゥキディデスの『歴史』(Thoukydides, *Historiai*, BC.5thC)の翻訳がなされてからとされている。なお、正史に対して民間で編まれた「史」は「野史」と呼ばれる。

日本の場合、『日本国語大辞典』は、18世紀中期の通俗神道家、増徳残口(1655-1742)の談義本『艶道通鑑 [えんどうつがん]』のうちに「歴史」の用語を認めているが、これは明の袁黄の撰になる『歴史大方綱鑑補』(39巻、首1巻)の和刻本(1663)などからの誤用とも推測される。日本の儒家は一貫して「史」を使用しており、「歴史」の語が一般に流布していたとはいいがたい。基本的には、明治初頭の啓蒙知識人の使用からと考えてよいだろう。

2-2 中国の「史」とのちがいは

つぎに、「はじめに」に記したように、史実と虚構の関係について、留意しつつ、日本における近世までの歴史観と歴史叙述の特徴を列挙する。

A. 中国の断代史観に対して、皇統の連続性により、通史の意識が強いこと。

B.中国の場合、官吏による文書管理（前代の記録を後代の官吏が編纂）、文書の由緒を厳密に批判する一方で、文書の由緒が正しければ、内容が相矛盾する記述も併記するのに対して、日本の場合、『日本書紀』の「一書曰」の併記を例外として、それぞれの政権が、その権力構成を正当性するためのものとして書かれていること。したがって、見解は統一され、武家の場合は源氏と平家が交代で天皇家に仕える史観（武家の「神話」）が形成されるなど、価値観の転換がはなはだしく、権力による歪曲、改竄、補綴が、中国より容易に頻繁になされたこと。

C. 上記のふたつの理由により、天皇家、摂関家、武家の政権交代にともない、三種類ないし四種の古代からの通史が編まれたこと。まず、古代王権が編んだ「漢文」による編年体の「六国史」、すなわち『日本書紀』(720)以下『続日本紀』、『日本後紀』、『続日本後紀』、『日本文徳天皇実録』、『日本三代実録』(901)が編まれた。そして、あたかも、それにつづけるかのようにして藤原道長(966-1027)の世をたたえるために摂関家が、章題をもつ和文の物語形式で『栄花物語』正編(ca1030)を編み、そののち、藤原摂関家は、平安後期から南北朝期にかけて、中臣氏以来の藤原一族の正史にあたるものを、問答、座談形式を用いて『大鏡[おおかがみ]』(850~1025を記載)、『今鏡』(1025~1170を記載)、『水鏡』(神武[じんむ]天皇より仁明[にんみょう]天皇までの1510年間を記載)、『増[ます]鏡』(1180~1333を記載)に展開した。平安朝中期の和文仮名文字主義には、「史」よりも「物語」の方が、事実や人間の心の細部を書くことができるという価値観を伴っており、これによって、採用された形式であり、天皇家の「正史」に対抗しつつ、かつ、その領分を侵しえないという意識によるものと推測される（これらは、その形式から「歴史物語」と呼ばれるが、これは20thCはじめに「国文学」の世界に定着した語で、歴史学者は摂関家による歴史叙述として扱っている）。

その後、武士政権により、『平家物語』12巻(m13thC)、『太平記』40巻本(1370)(ともに、和漢混交文)が管理され、徳川幕府によって、中国の『資治通鑑』の名称と記述法にならい、「漢文」で、天皇一代ごとの編年体の形式をとり、『本朝通鑑』正編(神武天皇~宇多天皇)、続編(醍醐[だいご]天皇~後陽成[ごようぜい]天皇、1670完成)を編んだ。なお、水戸藩によって、中国の史記にならって紀伝体の体裁をとり、南北朝の政争に対して南朝を正統とする『大日本史』(神武天皇~南北朝の終わり)が編まれた。それぞれの政権の性格を正当化する「正史」というべきものが書かれ、ないしは管理され、そして、古代からの性格のことなる「通史」が四編、並行して存在するという世界にも類例のない事態が生じたわけである。

D.日本では古代から支配的な宗教が存在せず、神道、儒学、仏教が並び立っていたために、中国の「正史」には登場しない仏教の事蹟を記載していること。神話時代を含むことや、歴史的事件を政治の教訓にすることは、中国と同じだが、とりわけ中世からの歴史叙述に、より仏教的教訓化が色濃い。

E.『平家物語』は『源平盛衰記』、『義経記』などを周辺に生み出し、『太平記』とともに、中世から徳川時代を通して、民間に、芸能化、虚構化したものが広く流布し、断片化と伝説化がはなはだしかったこと。

F.徳川時代には、都市に民衆文化が多様に展開したが、権力の政治を風刺することが厳しく取り締まられたために、歌舞伎や浄瑠璃に、当代の事件を過去に舞台を移して展開することや、歴史上の事件を借りて、当代の風刺が行われ、観客は、そのような種類の虚構の裏を読み取ることに慣れ、虚実の二重性が常態化したこと。『太平記』と

『仮名手本忠臣蔵』(1748)の関係が、その典型である。民衆の間によく知られた『太平記』を土台にし、その登場人物(もちろん、歴史上の人物)に仮託して、幕府により違法として罰せられた、赤穂藩を脱藩した浪士たちが主君の敵を討った事件にかかわった人物たちを登場させ、また、『太平記』には登場しない人物を、いわば架空の人物として登場させている。また、徳川時代後期には、歴史上の事件を題材とする「講釈」が盛んになり、講釈師は「巷の先生」としての役割を果たしつつも、他方、臨場感を出すための粉飾もおびただしかった。古川柳にいわく、「講釈師、見てきたやうな嘘を言ひ」。そのようにして、歴史叙述も物語ないしは小説の境があいまいになったこと。

G、都市に民衆文化の興隆に伴い、価値観の転倒(とくに後期には大名、旗本に三味線を「粋」とし、武道を「野暮」とする風潮があった)、混交(「雅」「俗」は截然と区別されていたが、そのようなタテマエを崩すことが好まれた)が起り、中国よりも早くに、詩(「漢詩」と俳諧)、小説(物語と読本)などの各ジャンル史の意識も生まれた。それは虚実や雅俗の価値秩序を超えることを容易にし、粉飾を加えた歴史叙述と架空の物語とは区別されることがなかった。言いかえると、そこでは、「歴史上の事件や人物を題材にしたフィクション」という規範は生まれなかった。

2-3 「歴史」概念の近代的再編

19世紀末の日本は、皇統の連続史観と、プロイセンなど王権神授説を憲法の条項に残す立憲君主制を結びつけ、皇室崇拜と日本的な儒学(忠孝を重んじる朱子学にもとづき、しかし、親に対する孝よりも主君に対する忠を重んじる徳川時代の儒学を、天皇に対する忠に置き換えたもの)により、国民教化をはかる近代天皇制の下で、国民国家を形成し、かつ国民文化を育成してゆく時期にあたる。洋学派の知識人たちは、徳川時代の考証などの蓄積の上に、実証主義が浸透しつつある西欧近代の歴史学を受容し、世界各国の歴史が紹介される一方、後進国のステイト・ナショナリズムに立つ、新たな方法による日本についての歴史学と歴史叙述、そして歴史観が形づくられてゆく。その時期の歴史叙述と歴史観の特徴を、以下、10項目にまとめておく。

1、日本文明史が創出され、スペンサー(Herbert Spencer, 1820-1903)の社会進化論がダーウィン(Charles Robert Darwin, 1809-82)の生物進化論とともに浸透し、かつ、それが国家間の生存競争という観念に翻訳されて広く流布したこと。

2、文献学(philology)の輸入により、「日本のエンサイクロペディア」として『古事類苑』が編まれるなど、古典籍の整備が進んだこと。

3、ランケ(Leopold von Ranke, 1795-1886)の文献実証主義、すなわち「厳密な史料批判による客観的研究」が政治の世界を動かすまでになった西欧の「歴史学の時代」の影響を受け、知識人の議論に過去の歴史叙述からの引用を盛んにしたこと。ただし、幕末から維新期にかけて、小瀬甫庵[おぜほあん]『太閤記』22巻(1625)、頼山陽『日本外史』(1826)などが広く読まれていたとされ、その下地は整っていたともいえる。4、広義の「文学」概念に立って、日本の人文学史というべき「日本文学史」が形成されたが、これは「漢文」の書物を無視することができなかったために、“national language”による著作、という西欧近代的な観念を逸脱するものとなったこと(「伝統」ないしは「歴史」の二重の発明)。

5、伝統的な「文学」(経・史・子・集)が、哲・史・文に再編成され、「国史学」が形成され、西欧の歴史に対して、中国を中心とする「東洋史」も形成されたこと。

6、徳富蘇峰(1863-1957)率いる民友社は、人文学(humanities)を意味する広義の「文学」(ほぼ大学の文学部の「文学」。これについては後述する)の中心に、歴史

上の人物や事件についての「史論」をすすめることを主張し、それを『国民之友』誌上でひとつのジャンルとして展開したし、明治後期に出版資本のコングロマリットに成長してゆく博文館は、毎年のように種々の世界史と日本史のシリーズを刊行した。こうして日本文化は、いわば「歴史の時代」を迎えた。

7、知識人の間にドイツ流の文献実証主義が浸透し、それに伴い、歴史学は、伝説類を排除する一方で、当面する国家的課題に即して、歴史的過去を解釈しなおす傾向が広がったこと。

8、「立身出世」の鼓舞や修身の教育などにより、洋の東西を問わず、偉人伝や偉人の自伝などの読書が盛んになったこと、

9、自由民権運動の武器として「政治小説」が盛んになり、イギリスのディズレーリ(Benjamin Disraeli, 1804-81) やフランスのヴィクトル・ユゴー(Victor Marie Hugo, 1802-85)、デュマ・ペール(Alexandre Dumas père, 1802-70)らの手になる歴史小説の翻案も流布した。

10、徳川時代の多様な歴史読物が活字化されて流布する一方、帝国憲法と教育勅語に基づく「皇国史観」が種々の教育を通じて浸透し、民衆の間にも、歴史上の人物についての逸話が「忠臣と貞女」の教訓物語として広がったこと。¹

3、 時代小説の発生と展開、その概要

1 「時代小説」の発生

上記の6、7、8を基盤に、明治中期には、徳川時代を舞台にとり、庶民に狼藉を働く旗本奴を相手に、「弱きを扶[たす]け強きを挫[くじ]く」というモットーのもとに生きる町奴が暴れまわる村上浪六(1865-1944)の「撥鬢小説」などが人気を博していたが、明治後期には、中期からの浪曲が台頭することによって、講釈や落語は語りを聴くためのものから、速記を読むためのものへと位置を変え、その活字化、刊行が盛んになる。その売れ行きは、いわゆる文芸書の比ではなく、『文芸倶楽部』(博文館)など文芸雑誌の中にも講談速記の掲載をさかんにしてゆくものが出て、やがて専門誌ともいふべき『講談倶楽部』(大日本雄弁会講談社、1911)、『講談雑誌』(博文館、1916)も創刊された。新聞も、まず地方新聞が購読者の確保のために、1890年代に講談速記の連載を盛んにし、遅れて、「中新聞」(明治前期の政治記事中心の「大新聞」、巷の話題中心の「小新聞」のふたつが統合した形)化をとげた東京と大阪の大新聞が、大正期に入って夕刊を開始すると、その販売拡大の道具として、これを連載した。『大阪朝日』が早く、1917年のことである。

ただし、そうなると、口演される講談の速記に加えて、新作への要求も高くなり、講釈師とのトラブルをきっかけにして、『講談倶楽部』は1913年に小説家の創作になる「新講談」ないしは「書き講談」を掲載し、これが人気を博した。こうして、講談や浪曲、すなわち史実をふまえて細部を縦横に虚構化する形式を逸脱し、架空の人物を主人公にするなど創作的要素の勝ったものが出まわりはじめる。とりわけ大阪の立川[たつかわ]文明堂のそれに代表される「赤本」(従来、小説類の総称。初期には菊版、和綴じ、のち、小型洋装本)が、講談速記から創作講談に転じて、これを小型のポケット版として刊行、「立川文庫」の名で広く流通し、剣豪『荒木又衛門』、忍術つかい『猿飛佐助』、『霧隠才蔵』などが若年層や商家の丁稚らに愛読された。このうち猿飛佐助は、まったくの架空の人物である。

この背景には識字率の向上(満20歳の男子を対象とした陸軍省の壮丁調査によれば、1902年で尋常小学校卒業以上の読字能力をもつものは60%程度、1908年では80%を越える。その能力は〈賣捌所は韓國滿洲にも設けたり〉のような和文体ないしは、やわらかな「漢文」読み下し体が読める程度)と、庶民向けの資本屋の隆盛がある。もうひとつ、その人気の背景には、日露戦争、そして、その後の激しい競争社会への劇変に倦んだ民衆が、徳川時代を「太平楽」の世と見て、懐かしみ、その都市の民衆文化全般のリヴィアバルともいうべき現象があったことも働いていよう。

このような状況を背景に登場するのが中里介山の『大菩薩峠』と、岡本綺堂(1872-1939)の「半七捕物帳」のシリーズ(1917-)である。「半七捕物帳」は、コナン・ドイル(Sir Arthur Conan Doyle, 1859-1930)のシャーロック・ホームズものをヒントに²、江戸を舞台に下級の町役人が難事件を解決するものだが、肥前平戸藩主、松浦静山が1821年より書き綴った見聞録『甲子夜話』などに記された記録や巷説などを渉猟し、江戸の地誌の細部までも再現したものである。これは、明治中期に黒岩涙香(1862-1920)の翻案ものを主とした探偵小説が広く読者に愛好され、徳富蘇峰(1863-1957)率いる民友社も、尾崎紅葉(1867-1903)率いる硯友社も、あるいは幸田露伴(1867-1947)までもが、国際スパイや犯罪にまつわる物語に手を染めたあとの空白を埋める役割を果たした。その背後には、失われてゆく徳川後期についての記憶の聞き書きが明治後期から始まり、また、徳川時代の随筆類の活字化が盛んになったことなどがあげられる。そろそろ江戸の風情を残す景色が東京から失われてゆく、と日本画家たちの嘆きが美術雑誌『中央美術』(たとえば1917年2月号、小特集「名勝地保護問題」)などに見られる時期のことである。

森鷗外(1862-1922)が「興津弥五右衛門の遺書」(1912)、「阿部一族」(1913)などから「渋江抽斎」(1916)にいたる史料と考証をもとにした小説群を手がけるのも、この時期である。鷗外は「歴史離れ」に対して、「歴史其儘[そのまま]」を唱えるが、その漢語を多用し、よく整えられた文章からは、しばしば講釈師の声調が響いてくるかのように感じられる。また、芥川龍之介(1892-1927)がキリシタン史料をもとに、ときに史料を偽造しながら小説化するのも、この時期にあたっている(背景には江戸趣味とエキゾティシズムが結びついたキリシタンもの、より広くは「南蛮」もののブームがある³)。森鷗外、芥川龍之介ともに、アナトール・フランス(Anatole France, 1844-1924)やメリメ(Prosper Mérimée, 1803-70)らの史実や伝説に取材した小説の面影を宿す作品を残していることも、歴史叙述と小説の関係を考える上では見逃せない。なお、芥川龍之介が「地獄変」(1918)の後を受けた形で書いた新聞連載小説「邪宗門」(1918、途絶)は、「でございます」調の語り体で、僧侶とバテレンの方術比べなどを繰り広げるもので、ほとんど創作講談に近いことを付け加えておこう。

タテマエとして虚構を軽視する価値規範が強く働きつづけた中国とは異なり、徳川時代には、たとえば近松門左衛門(1653-1724)の唱えた「虚実皮膜」の技法がよく知られたこと(明治期に入って、近松はかなり早くから、「日本のシェイクスピア」と持てはやされたが、この言葉は、お雇い外国人の口から出たと推測される。徳川時代の民衆が広く享受した文芸は、明治中期以降、「国文学」アカデミズムの体制が整ってゆくにしたいが、蔑視の対象とされてゆくが、近松門左衛門の戯曲は、瀧澤馬琴[1767-1848]の読本、松尾芭蕉[1644-94]の俳諧とともに、例外的に賞賛を集めつづけた)など考えあわせるなら、それは、想像力による虚構を尊重するヨーロッパのロマンティシズムの価値規範を、中国に比べて、受け入れやすい文化的基盤が日本にあったことを意味するだろう。

しかし、同時にそこには、想像力を史実など経験的事実にまつわせて発現することへの傾斜があったことも指摘できるだろう。すでに述べたように(1-2-7、8)、徳川時代において、歴史叙述と物語ないしは小説の境があいまいで、粉飾を加えた歴史叙述と架空の物語とが区別されることはなかった。そのような小説類が明治期に活字化されて流布し、さらにそこにイギリスやフランスの歴史小説、すなわち歴史的事件を背景にしたフィクションの翻案が流行した。そのようにして、史実に取材し、粉飾を凝らすものと、特定の時代背景の上に虚構を展開する小説群とは、まず同類のようにみなされたまま、その間の振幅を繰り返すことになってゆく。そして、それは各時期を通じての傾向だけではなく、日本近現代の「時代小説」作家を代表するふたり、中里介山と吉川英治の、それぞれの作品の履歴においても、十分、指摘しうることである。

2 「大衆文学」の隆盛

中里介山の『大菩薩峠』は「都新聞」に連載開始(1913)のころから、泉鏡花(1873-1939)ら一部の関心を引いたものの、当初から人気を博したわけではなかった。その人気が本当に広まるのは、白井恭二〔しらいきょうじ〕(1889-1980)らの活躍によって、「大衆文学」の機運がいよいよ高まる時期のことである。

その白井恭二は、1920年前後から、「大衆文芸」に類似した語を口にしていたという。彼は社会主義に傾いた一時期をもっている。1920年前後には、ウィリアム・モリス(William Morris, 1834-96)、ロマン・ロラン(Romain Rolland, 1866-1944)、エレン・ケイ(Ellen Key, 1849-1926)らの思想に刺戟を受けた民衆芸術論が盛んになり、『資本論』の翻訳者として知られるが、ロシアの1917年革命に革命の現実性を見て、「国家社会主義」に転じた高島素之〔たかばたけもとゆき〕(1886-1928)が「大衆運動」の語を用いはじめ、また日本共産党を創設した山川均〔ひとし〕(1880-1958)が「大衆の中へ」をスローガンとした時期にあたる。

そして、白井恭二は、1926年、江戸川乱歩〔らんぽ〕(1894-1965)、直木三十五〔なおきさんじゅうご〕(1891-1934)らを誘って雑誌『大衆文芸』を創刊した。すぐに『中央公論』が「大衆文芸」をめぐる特集を組み、週刊誌『サンデー毎日』が「大衆文学」の懸賞募集に乗り出すなどの動きが生じた。白井が江戸川乱歩を誘ったのは、乱歩が謎解き中心の探偵小説作家として、かなりの人気を得ていたからだが、白井のデビュー作『怪建築十二段返し』(1920)も江戸のカラクリ屋敷を舞台にしたものだったし、「捕物帳」に見られるように時代小説と探偵小説は類縁性をもっていたからでもある。そして、白井の企画で、「円本」として売り出された『現代大衆文学全集』(平凡社)がヒットしただけでなく、その大量宣伝によって「大衆」の語も一般に定着した。

「大衆」は、もと仏教用語で、大勢の僧侶の意。単に大勢の人間の意味で用いる例がそれまでも、まったくないわけではないが、その語が、この時期に瞬く間に定着したのは大量生産、大量宣伝、大量消費のシステムが稼動しはじめ、廉価な商品の渦と、関東大震災以後、全国化した大新聞、そしてラジオ放送も開始され、文字通りのマス・メディアが成立し、それらから流される情報を、階級や身分を問うことなく、みな等しく享受しうる状態が出現しはじめていたからだった。これを「第一次大衆社会化」と呼ぶ人もいるが、まだ都会と農村とでは一般的な文化差が激しく、都会の新風俗が農村の支配層からは拒否される傾向もあったから、この現象を私は「都市大衆社会」の形成期とし、その文化を「都市大衆文化」の名で呼んでいる。

したがって、日本の「大衆文学」の語は、はっきりとした歴史的な刻印を帯び、かつ、すぐあとで述べるように、時期によって次第にその範疇を変えてゆく概念であり、英語の“polite literature”に対する“popular literature”とは、似て非なるものといわざるをえない。“popular literature”に相当するものは、日本の場合、中世の御伽草子類から認められ、徳川前期にはヨーロッパより早く、はるかに豊かに展開していた。都市の町人文化が多様に花開いていたからである。

文学青年たちを読者対象とし、「私小説」から転じて「心境小説」を主流にしてゆく大正期の「文壇」小説の傾向に対して、「大衆文学」は勤労大衆に娯楽と思想を提供する文学運動という側面を当初は強くもっていた。「国民文学」の創出を目指す気概をも、そのうちにはらむものだった。だが、1930年を前後する時期に、マス・メディアの要求に迎合するうちに、全体として低俗に流れ、芸術や思想的な側面を強くもつ文芸と区別するジャンル名のようになっていた。そして、当初は、「時代小説」と「探偵小説」からなり、当代の風俗小説を除外して出発した「大衆文学」は、1930年代後半ころには、当代風俗を扱うという意味での「通俗小説」をもふくむ呼称となってゆく⁴。

史実をもとにした、ないしは、特定の時代を背景にした小説類は、それまで、歌舞伎の「世話物」に対する語を借りて、「時代物」ないしは「髻もの」と称されてきたが、「大衆文学」のうちに、当世風俗小説、すなわち「通俗小説」をふくみこむようになるころから、それと区別するために、「時代小説」と呼び習わすようになっていったと思われる。つまりは歴史小説のうちの、「大衆文学」に属するものを、「時代小説」と呼んだのである。

「大衆文学」に対して、芸術性の高さを目標とする小説は、「文壇文学(小説)」、「芸術文学(小説)」などと呼ばれ、一部に「純文学」の語も用いられた。ただし、広義の「文学」、すなわち人文学に対して、言語芸術を意味する「純文学」の語の記憶も残っていたので、「大衆文学」に対する「純文学」の用法は、一般化するにはいたっていない。

また、ただし、新聞や、多量の読者をもつ総合雑誌に掲載される作品、また観客を集めることを狙った演劇には、当然のこととして一定の通俗性が必要とされるので、作品の実態は、芸術性の多寡や、思想性の高低によって截然と二分されるものではないことはいうまでもない。そして、実際、1920年代後半から30年代にかけての新聞や総合雑誌の文芸欄に掲載された作品を、「芸術小説」と「大衆小説」に分類することなど不可能である。

1920年代から30年代にも、先にふれた野上弥生子「大石良雄」(1926)のように、大石主税(1688-1703)の心理に分け入りつつ、事件の経済的基盤への解釈をほどこすものもあり、真山青果「坂本龍馬」では坂本龍馬がもっていた一種の民権主義を浮き彫りにしていたし、そして真山青果は『元禄忠臣蔵』(1934-42)に密かに反戦の思想を埋め込んでもある⁵。また、昭和初年代の半ばを頂点に、いわゆる同伴者作家をふくめて、文芸ジャーナリズムを文字通り席捲した「プロレタリア文学」運動の中で、「芸術の大衆化」をめぐる論議が起こり(実は、大正期の民衆芸術運動の中にすでにあった議論だが)、貴司山治(1899-1973)が『忍術武勇伝』(1930)を書くなどしている。

なお、歴史叙述と虚構との関連を考える上で、ぜひとも、ふれておかなければならないのは、1920年を前後する時期から、ルポルタージュが盛んになり、それが歴史叙述にも大きな影を落としていることである。国際的にはジョン・リード『世界を揺るがした十日間』(John Reed, *Ten Days That Shook the World*, 1919)を先頭に、エドガー・スノ

一『中国の赤い星』(Edgar Parks Snow, *Red Star Over China*, 1937)、ジョージ・オウエル『カタロニア賛歌』(George Orwell, *Homage to Catalonia*, 1938)などルポルタージュの傑作が生まれたこと、戦争の現場レポートを中心にした読み物が盛んに書かれ、小説でも自身の生々しい戦場体験を織り込んだ、即物的な描写によるレマルク『西部戦線異常なし』(Erich Maria Remarque, *Im Westen nichts Neues*, 1929)が爆発的に読まれ、ヘミングウェイ『武器よさらば』(Ernest Hemingway, *A Farewell to Arms*, 1929)が書かれもした。

日本でも、とりわけドイツの左翼文芸におけるルポルタージュの隆盛の影響を受けて、「プロレタリア文学」運動の中で、これが盛んになった。この流れは、左翼運動と、その挫折、そして戦争など歴史的イベントの体験記を盛んにし、日中戦争期から敗戦直後、1950年代にかけて、日本の文芸ジャーナリズムに、「記録文学」と「私小説」の未曾有の隆盛をもたらすことになった。しかし、そうすると、それらと歴史叙述ないしは「歴史小説」の境も漠然とならざるをえない⁶。言いかえると、20世紀中期以降のルポルタージュの隆盛は、歴史叙述と虚構との関係に大きな変容をもたらしたといえよう。

以上が概観であり、次に、日本近現代の時代小説を代表するふたりの作家、中里介山と吉川英治をとりあげ、その「文学」観と歴史観について考察し、時代小説をめぐる価値規範意識の変遷を解明する一助としたい。

3 中里介山と吉川英治、その「文学」観と歴史観

3-1. 中里介山の場合

中里介山は、『大菩薩峠』を「大衆文学」と呼ばれることを嫌い、いうなれば「大衆小説」と称したというエピソードが知られている。「余は大衆作家にあらず」(1934)では、トルストイの芸術観を引きあいに出しながら、「純文芸」と「大衆文芸」を二分する思考法に異を唱えている。「大衆小説」とは仏教的な宇宙観、すなわち一種の曼荼羅[まんだら]を開示するもの、という意味である。

『大菩薩峠』は時代を幕末にとり、舞台を日本各地に移しながら、無明の闇、ないしは善悪の彼岸に生きる剣豪、机龍之介を中心に、武士、旗本、和尚、土豪の娘、可憐な少女や、被差別部落出身の剽悍な少年らが活躍、実に様々な人物が入り乱れ、共産主義革命の夢が無残に打ち砕かれる様子、南洋にユートピアを築く夢などがちりばめられ、文体も場面にあわせて多彩である。この長編小説は、未完に終わったとはいえ、たしかに曼荼羅の名に価するかもしれない。幕末期の史実は、「新徴組」と「天誅組」の争いとして作品の中に導き入れられ、机龍之介が、これに巻き込まれるが、物語の展開につれて、彼も主要登場人物の一人にすぎなくなってしまう。その机龍之介の無明の闇にも、ロシア・ニヒリズムの影を指摘することもできるし、土豪の娘、お銀さまの共産主義革命の夢も、当代のものである。

しかし、この一篇をもって中里介山という作家を語ってしまうのは、あまりに無謀というものでしょう。日露戦争に際して激烈な反戦詩を書き、島原の乱を題材にとり、浄土宗の開祖、法然を好んで書いた介山は、自ら〈日本で最大的人格〉(「わが古今人物観」)と称する聖徳太子を主人公にした『夢殿』(1929)を書いてもいる。また、佐久間象山の伝記なども書いているが、こちらは『大菩薩峠』の途絶間際に、幕末に西洋の技術を学んで、南洋に船出する駒井能登守[のとのかみ]を造形するための研究という面があったと推測される。

中里介山は、「純文芸」と「大衆文芸」を二分する思考法に異を立てただけではなく、「聖者を描く文学」(1935)では、〈純粹の伝記いうのも文学と見ていいでしょう〉という「文学」観を披瀝している。それは明治期に支配的だった広義の「文学」——伝

統的な「経、史、子、集」に分類される中国伝来の「文学」と英語“polite literature”の意味が対応するとみなされ、形づくられた人文学に相当する概念——に基礎を置くものだろう。ただし、中里介山は「わが古今人物観」で、〈明治の文学者で紅葉ほど大きなものはない〉⁸とも述べている。これは言語芸術を意味する狭義の「文学」を尊重する態度と見てよいだろう。そのふたつの「文学」の間で彼の態度は揺れているようにも見える。

しかし、これは、最初は修辞学と同義で「文学」という語を用いながら、広義と狭義の「文学」の間を揺れつづけ、最終的に〈宗教と哲学は文学の要素〉（「今日の基督教文学」、1893）という結論に至った北村透谷（1868-94）の文学観に近い。つまり広義の「文学」に立って狭義の「文学」を尊重する態度とってよい。明治期日本では、キリスト教神学に付随して宗教学や宗教文学がなりたつた近代ヨーロッパとことなり、人文学のひとつとして宗教(学)が位置づけられたために、いわば神学と人文学との対抗関係の意識の希薄な宗教文学のような観念が成立したのである⁹。中里介山の思想は、天才の尊重などロマンティシズムの色濃いもので、北村透谷のそれに重なる要素も多い。介山が北村透谷に言及したことはないと思うが、彼はキリスト教社会主義の立場をとった木下尚江（1869-1937）には一時期、傾倒しており、その木下尚江が文芸に関心を抱いたのは北村透谷「厭世詩家と女性」（1892）に衝撃を受けてのことだった。これは、ひとつの系譜とってよい¹⁰。

文壇では、1910年を前後する時期に、狭義の「文学」が優勢になり、広義の「文学」概念を駆逐してゆくように見えるが、明治期に活躍した人びとは、依然として、そのような観念の配置を保持しつづけていた¹¹。大正末に刊行され、「円本」の嚆矢となった改造社版「現代日本文学全集」の編成も、広義の「文学」概念に立っていると見なすことができるし、実際、木村毅（1894-1979）は、そのような見方をしていた¹²。が、しかし、改造社版「現代日本文学全集」は小説中心である。その意味で、中里介山の「文学」観は昭和戦前期にあって、格別、珍しいものではない。

中里介山『大菩薩峠』は、ヴィクトル・ユゴー（Victor Marie Hugo, 1802-85）らのロマンティックな歴史小説が、講談を媒介にして成ったものと見ることもできるだろうが、小説の形態としては、儒学を基調とし、仏教的な因果律や武士道精神を絡め、一定の歴史的背景の上に荒唐無稽な物語を展開し、加えて当代に対する風刺を潜ませる曲亭馬琴（1767-1848）の読本『南総里見八犬伝』（1814-1842）などに、むしろ近い。

このような『大菩薩峠』の形態を参照するなら、日本における「時代小説」の成り立ちが見えてくるだろう。それは、まず、「史実を背景にした虚構」というヨーロッパの歴史小説（明治中期には「政治小説」として翻案されたそれ）を、広義の「文学」概念に立ち、「歴史や伝記を想像力を駆使して書く」形式として、そして、歌舞伎や浄瑠璃の「時代もの」や曲亭馬琴の読本などを“receptor”にして、受け取り、かつ民衆芸術論など社会主義的な理念に媒介されて、成り立ったものだといえよう。中里介山の場合は、これで了解される。

「史実を背景にした虚構」という導線は、創作講談のうちに、架空の人物を活躍させるものを生み出しもしたが、逆に、歌舞伎や浄瑠璃、さらには一九世紀末から二〇世紀前期に、民衆に圧倒的な支持を得ていた講談速記の「史実に臨場感をもたせる粉飾」の形式が強く働くことによって、ヨーロッパの歴史小説の基本形式が崩れてゆく過程も、同時に、そこには観察される。そして、それは、次のような事態の進行と並行して進行した。西欧近代文芸を支配したロマンティックな価値観は、想像力による創造を尊重し

だが、日本では、ロマンティックな理念とリアリスティックな方法とが、「儒学」や「漢詩」の経験的事実(感情や想像を含めて)を尊重し、虚構の価値を低くみる態度や、感情の切実さに価値を置く本居宣長らの「国学」流の態度によって受けとめられたことにより、「実感」や「実景」を書くこと自体が価値規範化され、加えて、「知覚」や「意識」を第一とする、二〇世紀への転換期の哲学の動きが流入し、思想や感情から五官の感覚を重視する風潮が盛んになったことによって、そして、さらには二〇世紀前半の革命と戦争の時代にさかんになったルポルタージュを、小説の手法として活用されるようになり、想像力による創造性という西欧近代の芸術を律する価値規範が支配的になることは、一度もなかった。

そして、広義の「文学」に立ち、言語芸術を尊重する態度ゆえに、中里介山は〈法然上人の時代は源平の争いであったが、今日では横に国際、縦に階級の闘争となっている。これを救う唯一の道は、宗教の使命であります〉¹³(「法然上人と現代の悩み」、1933)という信念を、民衆ないしは大衆に向けた文芸を通して実現しようとした、といつてよい。その宗教とは、もちろん大乘仏教、それも日本化したものである。そのようにして仏教小説にして、「時代小説」たる『大菩薩峠』は成立した。そのような理念の持ち主は、この日本を長らく支配してきた「忠君愛国」と、よく闘う気骨こそが、自らの生の証であり、最後まで、それを貫いて、対米英戦争のさなかに逝った¹⁴。

このような中里介山の思想や「文学」理念をよそに、彼が切り開いた、ひとりの奇妙な剣客をめぐる、荒唐無稽な物語を展開する作風は、捕物帳とともに、昭和の戦前・戦後期を通じて、枚挙にいとまがないほど、実に多くのヴァリエーションを生み出し、広く大衆に愛好されてゆくことになる。

3-2. 吉川英治の場合

吉川英治は、中里介山より七歳ほど齢下だが、その「文学」観も「歴史」観も、中里介山とは、かなりの隔たりを見せている。彼は、下級武士の末裔に生まれ、貸本屋の立川文庫などに夢中になりながら育ったものの、家業が没落したために、若くして下層労働者に立ち混じって働いた経験も持つ。この作家は、少年向けの笑話の類から出発して、1926年から、大仏次郎『照る日くもる日』の「大阪朝日」連載と並んで、『鳴門秘帖』を「大阪毎日」に連載して、一躍、流行作家となり、荒唐無稽な時代小説を書き継いだ。だが、やがて、1932年の「檜山兄弟」あたりから、史実を掘り下げる体の作風に転じる。

その立場は、「正史」の権威を信用できない(『草思堂随筆』1935)と公言し、見方の相違などによって、〈ほんとの実話というものはありません〉(同前、「史実ナンセンス」)とも述べ、そして、歴史家の書く歴史から零れ落ちるもの、埋もれたものを拾いあげて書くことを信条とした(『窓辺雑草』、1938、「史話片々」)。この反権威、反権力の姿勢は、中里介山と共通するものの、介山のようにロマンティックな信念を貫くのではなく、記述されたものに対して冷めた相対化をはかる姿勢を身につけている点で、大きな相違が認められる。

ここにもうひとり、日本近現代の「時代小説」を代表するひとり、大仏次郎(1897-1973)を入れて考えるなら、吉川英治は、三人の中間の世代ということになるが、大仏次郎が温和な啓蒙知識人の面影を宿しているのに対して、昭和戦前期の吉川英治の姿勢には、これらの物言いにも明らかなように、権威に対して突っかかってゆくような苛烈なところがあり、また、いわゆる歴史家に対抗して、時代の習俗、生活文化の研究に向かう姿勢を明確にしてもいる。民衆が生き生きしている時代、すなわち歴史の過渡期を好

んで書き(同前、「僕を書くもの」)、歴史における女性や子供の役割を重視する姿勢なども、いわゆる大正デモクラシーの時代に育まれた知性のゆえだろう。史料を相対化する姿勢も、そうやってよいかもかもしれない。

ただし、明治維新を国際的観点から評価すべきだ、という主張(同前、「視野を拓げよ」)は、1932年ころの一時期、親交のあった服部之総(1901-1956)の『黒船前後』(1930)から学んだものだ。史料批判の態度も、あるいは進歩発展史観も、講座派の論客として鳴らしはじめたころの服部之総から学んだもの、ないしは、彼との付き合いによって固められたものといえるかもしれない。

ところが、同じころ、1932年1月(この月末に上海事変が勃発)に伊勢神宮に詣でた吉川英治は(厳肅な、民族自覚)を覚え、そして、五・一五事件に痛く刺戟を受け、井伊大老を扱った「女人曼荼羅」を書いた、と自ら明らかにしている¹⁵。これは、1935年8月に起こった永田軍務局長に対するテロルが行われたことに対して、海音寺潮五郎(1901-77)が『大老堀田正俊』(1938)を書くことによって、テロリズムの横行に対する抗議の姿勢を示したのとは対照的といわざるをえない。さらに吉川英治は、1934年に「大乘的精神による生命主義」をとえ、「日本ファシズム」すなわち天皇制下のアナキスティックな農本主義革命を展望して、著作が発禁にもなった倉田百三(1891-1943)と気脈を通じて、地方文化の育成に力を注がねばならないと考えるにいたる。吉川英治が「骨肉愛」とともに「郷土愛」を書くことを信条とする態度¹⁶を固めたのも、このころのことといえるかもしれない。

そして、彼は二・二六事件に、「革新の時代」の到来を実感している(「近代金沢八景」、「二・二六事件とその連想」)。1932年に「ファシズム宣言」を行って文壇に波紋を投げた直木三十五(1891-1934)が、その年、「楠正成」を書いたことにも注目している。この天皇への忠義を中心とする日本主義は、中国戦線で死んだ杉本五郎が「軍神」とあがめられ、1932年末に、「絶忠」の精神を掲げるその遺書『大義』が刊行されると、軍部と右翼によって、一挙に時代の風潮をかたちづくるものになってゆく。

底辺や下層を生きる人びとに身を寄せて、権力を撃つ革新こそを好む、一種の革命主義というべき思想が、吉川英治にはあった。民族革命の思想といってもよい。この革命主義は、ナンセンスに現を抜かずばかりの大衆に〈希望と信念〉を与え、〈日本人の神、つまり民族的な血液〉を〈輸血〉するために、大衆を目覚めさせるような「故人を呼び返す」ことを戦略として選ぶ(「故人を呼び返す」、「宮本武蔵を書く」)。剣豪ものに有名だった宮本武蔵の遍歴を書き、「剣禅一致」の境地の求道者へと、その像を変えて圧倒的な人気を博した『宮本武蔵』には、日本民族の精神革命の企てが潜められていたのである。

なお、『宮本武蔵』を書くころから、吉川英治は、それまで自身を「時代小説」作家と呼んでいたことを改め、自作を「歴史小説」と呼んでいる。そして、『宮本武蔵』には、剣を乱世の凶器から平和を守るためのものへと変じる思想が書かれていると、たしかに言える。だが、日中戦争から対米英戦争にかけて、戦争が「東洋平和を守る」ためのものと喧伝されていたことを考えに入れば、『宮本武蔵』が、戦争の時代を生きる支えとして、東洋的な求道精神を多くの読者に「配給」したという事実は否定しようもない。その作家は1942年、対米英戦争下に、海軍史編纂の依頼を受け、海軍軍令部嘱託となり、やがて文部省嘱託へ転じて、〈日本の新しい道徳〉(「江田島寸感」)に思いをめぐらしもした。

敗戦後、吉川英治は挫折感から筆を折ったが、一年半ほどで、作家活動を開始し、

『新・平家物語』(1950-57)は、平和への祈りを込めた国民文学と称されるまでになった。だが、彼の日本近現代に対する進歩発展史観は、まったく裏返し、日本は明治から昭和戦後期にかけて次第に退落していったという歴史観に転換する。そして、それは天皇が次第に庶民から遠ざけられてゆく過程として、想い描かれている¹⁷。

4、結び

日本における歴史叙述は、中国にならうところに出発したが、天皇家の「連続性」の外観の下に、天皇家、撰閲家、武家へと政権交代が起こったことに伴い、権力の正当化のためのものとなり、言語も形式も異なる「正史」の重層化が起こり、また、中国に比べて歪曲や改竄をはなはだしくした。平安時代中期の貴族階層には、「史」よりも「物語」にこそ、細部の事実や人情が示されるという考えがあり、これを淵源として、経験的事実を重んじ、虚構を排する儒学の理念が崩れていったこと、また、武家政権のそれ、とりわけ『太平記』は周辺に多くの伝承を伴い、中世から徳川時代を通じて、それらが広く民衆の享受するところとなり、断片化と伝説化、芸能化による粉飾がはなはだしく行われたこと、などが近世までの特徴としてあげられよう。歴史叙述と虚構との関係を考察する上で、とりわけ注目すべきことは、徳川時代に民衆文化が多様に開花し、各種の演劇の中で、史実を虚構化して「再現」することが盛んになったことだろう。権力が忌避する事件を、舞台を歴史的な過去にとることで弾圧をまぬがれようとする手法が、ひとつの様式になり、これは「虚構を通して事件を視る」という虚実の二重性を常態化し、歴史叙述と物語や小説の間に境界をもうけない態度を一般化した。そして、それは権力者の書く「史」に対して、自己正当化のための虚偽を見出そうとする態度と表裏一体をなすものといえよう。

明治期知識人によって、徳川時代の考証的態度をリセプターとして、西欧近代の実証主義、文献実証主義の導入がはかられ、西欧の「歴史学の時代」が日本にも移された。「万世一系の皇室」史観の下に新たな「日本史」の叙述が作られる一方、当代の政治的課題に対して、伝説類を排除しつつも、ご都合主義的に歴史的事件や歴史叙述を引用し、教訓を引き出すような態度も常態化した。たとえば、徳川時代の儒者から「弑逆王子」と非難されていた聖徳太子が、立憲主義者によって、立派な政治家として賞賛されるようになったことなどを想えばよい。

他方、自由民権運動が、その武器として、ユゴーの『九十三年』(Quatrevingt-Treize, 1874)をはじめフランス革命ものなど、好んで西欧の「歴史的事件を背景としたフィクション」を導入したのち、識字層が拡大し、民衆の享受する読み物や講釈の類の活字化が進むにつれて、歴史上の人物や事件を題材にとり、臨場感をかりたてる粉飾をさかんにした読み物が氾濫した。これを基盤として、創作講談が起こり、のち、探偵小説とあわせて、「大衆文学」を名乗るにいたる。「大衆文学」勃興の背景としては、勤労大衆に労働力再生産のための娯楽を与え、かつ「生活の芸術化」をはかる「民衆芸術」運動が大正期に起こったこと、関東大震災後の帝都復興を契機として、マス・メディアによる都市大衆文化が広がる時期にあたっていたことがあげられる。そして、この流れは、1930年を前後するころから、「時代小説」と呼び習わされるようになる。

「時代小説」の作風は、講釈を継承して、史実に臨場感を持たせる粉飾をはなはだしくするものと、一定の時代を背景にした荒唐無稽な虚構の読物とを二極として、その間を揺れ動く。後者は、徳川後期の瀧澤馬琴の読本などを先行例としてもつもので、これを代表するのが、中里介山の『大菩薩峠』である。これは、西欧近代の、とりわけヴィ

鈴木貞美

クトル・ユゴーの政治的ロマンティズムと講談の臨場感などを結びあわせ、作家独自の仏教的反権力主義の理念を展開したものである。

他方、吉川英治が荒唐無稽な物語から、歴史上の人物や事件に、その時代の生活風俗をからみあわせて、登場人物とその心理および生活ぶりを肉付けし、かつ、当代の読者に親しみやすく造形してゆく手法に移っていったことに典型的に見られるように、史実に臨場感をもたせるための粉飾を行う講釈の形式を土台にし、その粉飾の内容を、登場人物の心理や文化的環境に求める作風がさかんになっていった。

これは風俗、心理の研究などを特徴とするフランス・モラリストの伝統が、民衆の風俗を客観的に描く方向をとったフランス・ナチュラリズムの手法に転換したものと言いうるかもしれない。しかし、ナチュラリズムが自然科学、とりわけ医学や生物進化論などを背景にしていたのとは異なり、吉川英治には権力の手になる史料を批判する相対化の態度が顕著である。その背景としてはランケの文献実証主義についてマルクス主義の「科学的」な歴史研究の態度が浸透したことが指摘できるだろう。また、はじめはプロレタリア文学運動が積極的に導入をはかったルポルターージュが、歴史的な過去の現場の「再現」という手法を、よりさかんにしたともいえよう。ただし、吉川英治が身につけた進歩発展史観と革命主義は、民族主義的な精神革命を目指す方向に向かい、日本的ないしは東洋的な求道精神に大衆を目覚めさせることを、戦略としてとらせた。

中里介山と吉川英治は、ともに東洋精神に立つ思想を骨格として、世の中の変革をめざす「時代小説」ないしは「歴史小説」を書いたことは共通しているが、中里介山には広義の「文学」の立場とロマンティックな理念、そして、天皇制に反対する立場が一貫しているのに対し、吉川英治の革命史観は、それまでの歴史観を相対化する、いわば科学的思考に支えられ、かつ、風俗史や生活史の研究を重ねたものであり、その政治姿勢は、たとえていえば、文芸を政治の道具とした「プロレタリア文学」を「昭和維新」に共鳴する立場から実現するようなものであった。「プロレタリア文学」には、当時の広範な大衆の心に訴えるような作家は誰一人として出なかったが、戦後の「民主主義文学」の陣営では、松本清張(1909-92)が権力の闇に迫る社会派推理小説を書いて、人気を博したことが、比較の対象になろうか。

もうひとつ、日中戦争期には、恋愛ものなど排撃されるのに変わって、ルポルターージュが戦地報告などを盛んにする一方で、日本史の読物が盛んに書かれたことも付け加えておかなければならない。ただし、その中で、たとえば石川淳(1899-1988)は新田義貞の活躍を書く「義貞記」(1942)を書いている。南北朝期に題材をとり、かつ、新田家は徳川家はその祖とした家筋であることを思えば、その選択の意味するところは自ずと明らかだろう。

第二次大戦後も、「歴史小説」や「時代小説」は、ある思想によって史実に解釈を加え、かつ、臨場感をもたせるものと、ある時代設定の上に荒唐無稽な物語を繰り広げるものを二極として展開する。ただし、いくつかの点で、第二次大戦前とは異なっている。

第一は、たとえば田宮虎彦「落城」(1947)のように、徳川時代末期の史実に仮託して、日本の敗戦を書くが現れたこと¹⁸。これは徳川時代に盛んになった虚実の二重性の積極的援用だが、大岡昇平「浮虜記」が占領下日本のアレゴリーとして書かれたことや、安岡章太郎「ガラスの靴」や「ハウス・ガード」などもやはり占領下の現実をアレゴリカルに書いていることなど、必ずしも「時代小説」に限ったことではない。これは戦中、占領期と、権力の担い手はことなるが、強い軍事力による支配が続く中で、ごく

自然に起こったことだったといえるかもしれない。戦中期には、徳川時代に権力へ抵抗の手段として行われた韜晦の手法を石川淳が呼び戻してもいた。

第二は、権力の裏側の闇に迫る松本清張の「昭和史」ものなど、史料を駆使したルポルタージュの手法を活かした現代の歴史小説や歴史叙述が、読み物として盛んになったこと。そのような流れは、いわゆる「時代小説」の流れにも、うかがわれ、海音寺潮五郎は、日本史の史実に対する造詣をますます深くし、ほとんど、史実の記録そのもののような文章によってストーリーをつづるようになってゆく。こうなると、まるで、「時代小説」と「歴史小説」の区別も、ストーリーとヒストリーの区別も消えてしまうかのようだ。

この流れに、歴史上の人物について、新聞記者が足で取材して、その生活の軌跡の空白を埋め、新聞記者風の文体で、その生涯や時代をつづる作風が生み出される。すなわち、歿後、にわかに「国民文学」作家との声がかまびすしくなった司馬遼太郎(1923-96)の作品群である。ただし、司馬遼太郎を語るには、戦後の「時代小説」群に生じた、もうひとつの特徴を加えておかなければならない。

一九六〇年代に「百万人の作家」の異名をとった、これも日本近現代「時代小説」作家を代表するひとり、山本周五郎(1903-67)に見られる傾向である。その作風は、伊達藩の寛文事件と、それにかかわった家老、原田甲斐の苦悩を書く『樅の木は残った』(1954-56)のように、徳川時代の武士の苦渋を書くもの、江戸の反骨の町医者を中心にした『赤ひげ診療譚』(1958)のように江戸の庶民の哀歎をつづるものに分かれるが、これらは敗戦後の復興期から高度経済成長期にかけてのサラリーマン層にとっては、自身の会社での組織内部での苦渋と生活上の哀歎を重ねて読むのいうってつけに作られている。司馬遼太郎は、この点を確実に山本周五郎から受け継いでいる。なお、山本周五郎は宮本武蔵の偶像化に対して、それを引きずりおろすような短編「よじょう」(1952)を書いてもいる。

他方、歴史的な過去を背景として虚構を展開する作風の「時代小説」群は、1960年前後する時期に出版社系の週刊誌が発売されたときに、社会派推理小説とともに、その販売拡大の中心を担った。これは、当代風俗小説とともに、第二次大戦後に、良識による、しかし肩のこらない小説という意味で和田芳恵〔よしえ〕(1906-77)が名づけた「中間小説」¹⁹と呼ばれて、柴田錬三郎〔れんざぶろう〕(1917-78)、五味康祐〔ごみこうすけ〕(1921-80)、池波正太郎〔いけなみしょうたろう〕(1923-90)らの作品が親しまれた。

とりわけ、医学の知識を土台に奇想天外な忍術ものを書き、ブームをつくった山田風太郎(1922-2001)にふれておかなければならないだろう。なぜなら、彼の『警視庁草紙』(1975)、『幻灯辻馬車』(1976)などの明治開化期ものは、細部は史実や地誌に立ちつつ、そのあわいに生じる仮説を積み重ねて、いつの間にか荒唐無稽の物語に転じてしまうものであり、日本近現代の歴史叙述と虚構との関係を考察する上では、特筆するに値するものだからである。

そして、1961年に文壇に起こった「純文学変質」論争が、明治期以来の小説群を「純文学」対「大衆文学」の二分法のスキームで分類する作法を發明し、「時代小説」を「大衆文学」のひとつと呼ぶ習慣が再確立すると、たとえば海音寺潮五郎について、〈『蒙古来る』(昭28-29)は剣戟過剰だが、大作『平将門』(昭29-32)で大衆小説から歴史小説に脱皮した。国史の造詣の豊かさで彼に匹敵する作家はすくない〉(大井広介、『新潮日本文学事典』, 1968, 1988)というような評言が成り立つようになっていった。

鈴木貞美

しかし、実際の作品に対して、娯楽性の多寡を基準にした「時代小説」「歴史小説」という二分法による分類はなりたないことはいうまでもない。

中里介山と吉川英治を中心に、日本近現代の歴史叙述、とりわけ「時代小説」「歴史小説」における史実と虚構の関係をめぐって考察する本稿は、この二分法の成立と定着を見きわめたところで、所期の目的を達したことになる。

NOTES

¹ See Suzuki Sadami, “The Reformulation of the Idea of History and the Publication of Historical Texts in Late Nineteenth-Century Japan,” translated by Jeffrey Angles, in *Historiography and Japanese Consciousness of Values and Norms*, International Symposium in North America 2001, ed. Joshua A. Fogel and James C. Baxter (International Research Center for Japanese Studies, 2003).

² その第一回にあたる「お文の魂」(1918)には半七が〈江戸時代に於ける隠れたシャアロック・ホームズ〉と称されている。『定本半七捕物帳』、第1巻、早川書房、一九六六年、32頁。

³ これについては鈴木貞美『梶井基次郎の世界』(作品社、2001) p. 281補注を参照されたい。

⁴ 鈴木貞美『日本の「文学」を考える』(角川書店、1998)を参照されたい。

⁵ 鈴木貞美、書評「野村喬『評伝真山青果』」(リテレール11号、1994年12月)を参照されたい。

⁶ 鈴木貞美「ドキュメンタリー・ジャンル論のためのプロブレマティックなノート」(『昭和文学研究』第44集、2002年3月)を参照されたい。

⁷ 『中里介山全集』第20巻、筑摩書房、20 vols., 1972、p. 52.

⁸ 同前、p. 51.

⁹ 鈴木貞美「北村透谷の『文学』観」、北村透谷研究会編『北村透谷とは何か』(笠間書院、2004)を参照されたい。

¹⁰ 「中里介山の仏教思想をめぐって」、『現代日本と仏教 第三巻 現代思想・文学と仏教』、平凡社、2000年を参照されたい。

¹¹ 鈴木貞美『日本の「文学」概念』、作品社、1998、pp. 241-245を参照されたい。

¹² 木村毅は『丸善外史』の中で、次のようにのべている。(円本として最初の改造社の「現代日本文学全集」は、いろいろな点で、日本のハーバード・クラシックスなのである。文学という中に、初期の戯作、漢文から通俗小説、家庭小説、少年文学までおさめ、さらに宗教や、史論から、新聞記事や、戦争記(これは山本氏がいいだした)まで入っている。別面からみると、文学を広義に解釈して、内容を取捨したのは、この全集が最後となった。東洋では、昔から「文章は経国の大業なり(巍の文帝)」で、明治中期までの文学史をみると、福沢諭吉、中村敬宇あたりから、知泉、羯南、雪嶺、蘇峰などの学者的文人や新聞雑誌の時論が中心で、小説家など正面座敷の存在ではない。明治末年から関東大震災あたりまで、まだ、池辺三山、山路愛山、内田魯庵、長谷川如是閑などが、文壇人として最高の大家として仰がれ、そして文学とは時事論、史論、宗教論、社会問題なども含めた広範囲のものだったのである。それを全面的に反映したのが、改造社の最初の円本「現代日本文学全集」で、その後は、これが切断され、文学とは、小説戯曲、詩、文芸評論、随筆の、いわゆる軟派の著作に限られることになった。改造の全集は、その両断の分水嶺をなして、広義の文学をあまねく収録した最後の出版

となったが、これは、昔からの東洋の文学観の踏襲であると共に、またじつに、古今の典籍をひろく網羅したハーバード・クラシックスが、手本となったからなのである。)

(丸善社史編纂委員会、1969、pp. 262-263、国士舘大学の目野由希さんの教示をえた)

文中、カッコの中の「山本氏」は改造社社長、山本実彦〔さねひこ〕(1885-1952)のこと。木村毅は、東洋の伝統的「文学」概念と西欧近代の“polite literature”の対応関係をよく知っていたといえよう。ただし、虚構に対する価値観の相違にはふれていない。また、出版物としての性格づけとしては的を射た見解であるが、広義の「文学」概念が、これを最後に消滅したわけでないことは、中里介山の用例からも明らかである。

¹³ 橋本峰雄「介山と仏教」(『中里介山全集』第十二巻、筑摩書房、1971 388頁)より重引。

¹⁴ 鈴木貞美「中里介山の仏教思想をめぐって」(現代日本と仏教Ⅲ『現代思想・文学と仏教——仏教を超えて』、平凡社、2000)を参照されたい。

¹⁵ 『吉川英治全集52』、講談社、1983、35頁。

¹⁶ 同前、80頁、144頁。

¹⁷ 鈴木貞美「吉川英治の歴史観」、『国文学解釈と観賞』、2001年10月号を参照されたい。ただし、四二ページ上段、冒頭近く、随筆集『窓辺雑草』の刊行年を(一九三八)に、また、四八ページ下段後半、〈『平家物語』と『太平記』は管理されて〉以降を、「武家政権の正当性と源平交代で皇室に仕えるという史観を語る、武家の正史にあたるものとなった」に改められたい。

¹⁸ 鈴木貞美「天皇制批判と近代批判」(『人間の零度、もしくは表現の脱近代』、河出書房新社、1987、所収)を参照されたい。

¹⁹ 第二次大戦後に、良識による、しかし肩のこらない小説という意味で、『日本小説』の編集者、和田芳恵〔よしえ〕(1906-77)が名づけたもの。